

和歌山城跡第 39 次発掘調査 現地公開資料

日時 令和元年9月14日(土) 午後1時30分～3時
主催 和歌山市産業交流局 文化スポーツ部 文化振興課
公益財団法人 和歌山市文化スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

はじめに

和歌山市では令和元年5月から市役所北側敷地において市営駐車場建設に伴う発掘調査(和歌山城跡第39次調査)を行っています。

和歌山城跡は、内堀までの国史跡の範囲とその外側周囲に広がる武家屋敷跡(三の丸)を中心とする範囲に分けられ、御三家である紀州徳川家の居城として知られています。

今回の調査地は、和歌山城の北側に位置し、17世紀中頃以降に紀州藩の役所のひとつである評定所が置かれていた場所で、藩の中核的な役割を担っていた地点にあたります。調査は、対象面積1500㎡を3分割し、既に1区を完了し、現在2区の途中となります。今回の現地公開では、1区の成果と2区の調査状況を公開し、出土した遺物の一部も展示しています。



1区 全景(南から)



発掘調査地(評定所) ※安政二年(1855年)和歌山城内町絵図(一部加筆)

調査成果

今回の調査地点は、江戸時代の城下を描いた絵図をみると、明暦元(1655)年に設けられた寄合場または会所にあたり、藩政に関わる諸事について話し合いを行う場所でした。その後、評定所と呼ばれる藩の財政全般を取り仕切る機関となり、御奉行(寛政五年(1793)八月以降勘定奉行と呼ぶ)などが政務を行っていました。この敷地の中央部では東西3.1m、南北5.5m、深さ1.5mの大きさをもつ大型石組遺構も見つかりました。この大型石組遺構(写真①)は、評定所が置かれた頃には既に存在し、その後規模を縮小させ造り替えられた状況が確認できました。そして、江戸時代後期には埋め戻されて井戸枠瓦を使用した井戸が造られていました。この他、水琴窟状遺構(写真②)などのものも見つっています。

今回の調査では、陶磁器類の蓋内面や外底面に墨書が施されたものが比較的多く出土しています。墨書には「山崎」・「森氏」などの氏名を示したものが多くあり、注目できるものに堺焼播鉢の外底面に、「寅七月十日 二分口 □調」の墨書(写真③)がありました。『南紀徳川史』には「二歩口役所 元役所は若山丸之内評定所内」と記載があり、この土器が評定所を裏付ける根拠のひとつとなりました。

その他の遺物では、評定所が置かれる前の安土桃山時代に遡る桔梗紋軒丸瓦や鷲森本願寺堀跡から出土したものと同タイプの唐草文軒丸瓦、江戸時代後期に徳川治宝の奨励を受けて崎山利兵衛が開業した御庭焼(高松焼・南紀男山焼)(写真④)の製品なども出土しています。



①大型石組遺構(1区・東から)



②水琴窟状遺構(2区第1遺構面・北東から)



③外底面に墨書された堺焼播鉢



④1区で出土した御庭焼(南紀男山焼染付碗)